

「国民的作家」ラムユその概要と受容

Un écrivain "populaire" suisse : Ramuz

加太宏邦

はじめに

本日は、ラムユというスイス人作家を素材として、文学の編制システムについて考えてみたいと思っております。

時間の制約もあるので、簡単に、ラムユを事例として、その紹介と日本での受容のエピソード、そして文学の編制という課題を紹介することにとどめます。ラムユという作家が日本ではほとんど知られていないため、前段に比重がかかる構成になっていることをお許しください。

タイトルの「国民的作家」とか、仏語タイトルの *écrivain populaire* は、人気作家とか大衆的作家という意味ではありません。国の文学を代表する、というぐらいの意味です。もちろん、こういう言い方が、ラムユについて、正当なのか、また一般的にも、一人のスイス人作家が、そのような呼称で呼ばれることが可能なのかという疑問があることは承知しています。ですが、話をわかりやすくするためと問題提起の意味であえてカッコをつけて「国民的」と呼ばさせていただきます。

「ラムユ、それ誰？」

この「ラムユ、それ誰？」は、東京の某大学の仏文科主任教授のことばです。

ある学生が、修士論文のテーマにラムユを選んで、教授に相談をしに行ったら、そういわれたのだそうです。学生は、ラムユはスイスの作家で云々…と説明をしたら、「フランスに綺羅星のごとく文学者がいて、その作品が山のようにあるのに、どうして、君はわざわざスイス人作家を選ぶのですか」と諭され、この学生は、結局、ラムユを断念したのだそうです。

仏文科の学生だからフランス(共和国)の作家を学ぶのが当然ではないかという、このエピソードは、スイス・ロマンド(フランス語圏スイス)文学の特質を考えるのに、とても大切なヒントを含んでいると思われます。このことが後で述べたい問題です。

ラムユの紹介

では、さきほども申しあげたように、(残念なことではありますが)ラムユが何者であるかを紹介しておかないと、話がはじまりません。簡単にではありますが、申しあげます。

ラムユは、シャルル・フェルディナン・ラムユ Charles Ferdinand Ramuz というスイス文学者です。

スイスでは、言うまでもなく、地域によって言語が異なります。彼は、ヴォー州 Canton de Vaud の人で、この州はフランス語圏に属しています。彼は、この州の州都であるローザンヌ Lausanne に生まれました。後にみるように、彼の作品は、日本でも紹介されたことがあるのですが、その名前の訓みも、出生地も、また様々な点でも、間違いだらけで紹介されたままでした。スイス人というのは、わが国では、ほとんど関心の対象でないので、ジャン＝ジャック・ルソーですら、長らく、日本の文学辞典では「フランス系スイス人」と紹介されていました¹⁾。たまたまジュネーヴ共

和国で生まれたフランス人というような扱いなのです。

¹ シンガポールの指導者リー・クワン・ユーさんが豪州に行ったとき、「今の豪州人が英国人だと思っていないように、われわれも中国人ではありませんよ、シンガポール人です」、そういったそうです(『場所の悲哀』(対談 李登輝／司馬遼太郎))

さて、ローザンヌは、言うまでもなく、世界に知られた国際都市です。その街の中心アルディマン街 Rue Haldimand の輸入食品店の息子としてラムユは生まれました。また、その生涯を、ローザンヌまたはその近郊のピュイ(ローザンヌから電車で 2 分程度)で過ごしました。つまり、彼はれっきとした都会人ですが、あとで触れますように日本における紹介のされ方は、おおむね山岳農民作家です。

もうひとつ確認をしておきたい点があります。それは、彼の母語がフランス語であることです。このことが、彼にとって、宿命的な問題となるのです。

さて、彼は、1878 年に生まれ、1947 年に亡くなりました。和暦でいうなら、明治 11 年から昭和 22 年までの人となります。この生存時代をイメージで示すと、島崎藤村(1872-1943)とか永井荷風(1879-1959)とやや重なる時代の作家でしょうか。

その略歴ですが、1900(明治 33)年にローザンヌ大学を卒業しています。ちなみにローザンヌ大学は、ほとんど彼の生家の目の前にありました(現在は移転していますが)。そこはローザンヌの町の中心とていい場所です。

卒業後、高校教師や、ドイツで家庭教師を少ししてから、1914 年までパリに断続的に滞在し、文学の研究、学位論文準備などをしていました。しかし、文学のありように複雑な思いを懷いて、結局帰国してしまいます。

帰省して、実作を始めます。詩作から始まり、Les Cahier Vaudois(「ヴォー州手帖」出版期間：1914-1920)などの郷土の同人誌に参加し、また主宰もします。フランス語で書く文学はパリにしかないような思い込みに挑戦するかのように、ヴォー州で、どのようにすれば、地域の自律的な文学が可能かを模索する活動の中心となっていくのです。徐々にその名がヴォー州で知られるようになります。

この文化運動について、また彼の小説、詩、エッセーなど作品研究については(スイスで)数多くの研究や著書が出されていますが、本日は、省略させていただきます。

その後、ピュイ Pully に「ラ・ミュエット」La Muette(狩小屋)と名付けられた家を構え、終生そこで著述に励み、1947 年(昭和 22 年)に亡くなります。私事ながら、この家には、二度ほど訪れたことがあります。そのころは、まだラムユの娘のマリアンヌさん Marianne OLIVIERI RAMUZ が、ご高齢ではありましたが、元気にしておられました(2012 年に 98 歳で亡くなったと聞きます)。

スイス・ロマンド文学における位置づけ

スイス・ロマンド地方(特にヴォー州とヴァレー州)に根差す「普遍文学」の成立を目指した作家、と位置付けることができるでしょう。

この普遍文学、という言葉には説明がいるでしょう。簡単に言えば、スイス・ロマンド地方はフランスの一部でない、そこで紡ぎだされるのは、「フランス文学」ではない「フランス語文学」という姿勢を貫き、フランス文学の中の地方主義者とか、まして農民作家でない、自律した仏語文学者の存在の可能性を追求するものだということです。

ラムユは、文学における中心(仏文学で言えばパリ)という枠組みに疑問をもったのです。もちろんそれは仏文学の偉大さを否定するものではありません。

こういう考え方は、この地で文学を志す人々に自信をもたせ、また鼓舞もしたのです。これはラムユの偉大さといえます。一方で、自らを縛る軛ともなったのです。スイス文学であり続けながら、どうやって、パリ中心のフランス語文学と別の、かつ同等の意義を表明することができるのでしょうか。地方主義文学者というレッテルは、相手が貼り付けて来るもので、自分としてはこれから逃れるという消極的なことだけいいのだろうか。

ブレーズ・サンドラールは(その気質によってでしょうが)フランスに帰化することで偉大な詩人となり、ルコルビュジェも同じく偉大な建築家となったのではないか。そういう離郷という軽やかな方法だってあるではないか、しかしその場合、アイデンティティはどうなるのだろう、なにより、なぜ、スイス・ロマンドの文学従事者はこういう問題に逢着し、フランス人は免れるのか、これら複雑な問題は、別に論じたことがあるのでここでは省略させていただきますが²⁾、スイス・ロマンドの多くの文人には解けないパラドックスを突き付けることになりました。

「20世紀フランス語圏スイスで最も偉大な文学者」

いずれにしても、現在、ラムユの生家には、「20 世紀フランス語圏スイスで最も偉大な文学者」 le plus grand écrivain de Suisse francophone du XX^e siècle として顕彰する銘板が掲げられています。しかし、ほとんどのスイス人は、この記念標識の存在を知りませんし、また関心もないようです。スイスのフランス語圏に育った人たちは、学校教育を通じて、フランスのモーパッサンやボードレールは(日本人が清少納言や太宰治を習うように)よく知っていますが、自国のラムユに関心をもつ人は多くありません。

しかし、ラムユは、わが国の夏目漱石と似て、スイス連邦の紙幣(1997年発行)では200フラン(邦貨で2万円札に相当)に肖像が描かれ、また、切手の図柄にも使われています。すなわち、「国民的」という通俗的なイメージはあながち外れてはいないことがわかるでしょう。けれど、先ほど述べたように、スイスでそのことは自然に受け入れられているのか、という疑問は相変わらずあります。とくに、スイス人口の 7 割を占めるドイツ語圏の人々にとっては、よその国のマイナーな作家扱い(というとし言い過ぎですが)、に近いものがあります。

フランスには、校閲のしっかりした権威ある(といわれる)プレイヤード叢書というのがあります。この叢書に組み入れられるということは、その作家がフランスで認められた「大」作家である、と一般に思われています。少なくとも、文学の世界では、大作家に限られます。この叢書に、2005 年ラムユは仲間入りしたのです。スイス・ロマンド地方では、このニュースは各新聞のトップを飾りました。「ラムユ、郷土にありながら、あの世界的権威の“プレイヤード叢書”に収録される」という大見出しでした。

このときに、ガリマール出版社は、次のようなキャッチ(売り文句)をつけて発売しました。「ラムユが地方作家であるというのは、ちょうど、ウィリアム・フォークナーがミシシッピに固着する、というのと同じ意味で、“土地”は作品の対象でなく、普遍への素材である」というものです。

この言い方は、なんとも苦しいキャッチだと感じるのは私だけでしょうか。フランスからのお墨付きで初めて、フランス外の一地域の文学が、「フランス文学？」として成立するのですから³⁾。

それでも、スイスでは、それと前後して、国内でも、新全集が編まれたり、メディアの盛り立てやラムユ賞場の動きが高まります。ラムユを読む者としては、たいへんうれしいことではあります。

ラムユの日本での受容

さて、それでは、ここで、日本でどう扱われてきたか、そのことでどういう問題が見えて来たのかというお話を、次の三つのエピソードでお話しします。

ラムユは、“プロレタリア作家”？“農村文学作家”？“山岳小説家”？というテーマです。

“プロレタリア作家”？

²⁾ 「スイス・ロマンド文学という制度」『スイスの歴史と文化』刀水書房 所収 1999 年

³⁾ この叢書には谷崎潤一郎が収録されている。この場合は、同じく収録されているトルストイやフォークナーやニーチェと同様、明らかに「外国」作品であり、なにより翻訳である。フランス語で書くラムユとは根本的にその位置づけが異なる。

唐突ですが、小牧近江(1894 -1978) という、フランス文学者でありまた社会運動家であった人がいました。現在では、ほとんど忘れられた人ですが。詳しく述べる時間的余裕がありませんが、彼は明治 43 年に 16 歳でパリへ渡り、苦学の末、ソルボンヌの法学部を卒業しました。当時、反戦を掲げる「クラルテ」運動の主催者であり、共産党員でもあったアンリ・バルビュス Henri Barbusse に傾倒しまして、帰国後、1921 年「種まく人」という同人誌を発行し、その運動の中心となるのです。その主張は、基本として平和主義、軍国主義批判、ロシア革命支持、朝鮮人や社会主義者弾圧抗議などです。

さて、この小牧は、パリで生活していたときに、たまたま(だと思われますが)ラミュの *Jean-Luc persécuté* という本を購入していました。「迫害を受けるジャン・リュック」と訳せるタイトルをもつ著作ですが、どういう動機で、小牧がこの本を買ったのか、わかりません。が、想像するに、その内容をよくは読まずに、貧農が、地主に「迫害を受ける」、いわば、小作の階級闘争の物語とでも勘違いしたのではないのでしょうか。実際には、この小説は、浮気をして男と逃げては、また戻ってくる悪妻に苛まされ、おかしくなっていくジャン・リュックという男の話です。最後には、今風の言い方をするなら、キレた主人公が妻を藁小屋で焼き殺す、という話です。いってみれば、追い詰められていくジャン・リュックの悲劇とでもいうべき、ラミュ初期の小説です。

さて、この小牧のエピソードに、石川淳(1899-1987)が登場します。ご存じのように、日本文壇で畏怖された大作家ですが、若い日(大正 15 年)には職も無く、生活費のために、翻訳をしようと思うのです。ちなみに彼は東京外語のフランス語科出です。友人の小牧に何か翻訳する本を貸してくれといい、借りた本がたまたまラミュの *Jean-Luc persecuté* だったのです。

石川は後にこう言っています。「小牧君がラミュズの *Jean-Luc persecuté* といふ本を貸してくれて、これをやれといふ。この本は当時日本に小牧君所有のただ一冊、たれも知らない」。

これを石川は翻訳し、それが出版されました。大正 15 年のことです。

おそらく、これが、本邦初訳のラミュと思われます。そのタイトルは『悩めるジャン＝リュック』(叢文閣版)です。作者名は「ラミュズ」という誤記になっていて、この読みは、わが国では、長らく定着していました。そして、これも後のことですが、石川は、その作品を、「なんでえ、つまらねえ、こんなもの、とおもった。お百姓の若い衆がばたばたする小説で、おおよわたしの好みにはかなはない」(昭和 26 年「文学界」4 月号)と回顧しています。実は、プロレタリア小説でもなければ、フランス文学的香りをもつものでもなかった、その期待との落差が大きかったのかもしれません。

“農村文学作家”？

ここに登場するのは和田傳(1900-1985)という作家です。和田は自他ともに認めている、農村・農民作家で、「日本農民文学会」の初代会長でもありました(『くろ土の唄』、『大日向村』、『沃土』、『土に生きる人々』、『農耕と文学』、『日本の村長』など数多い作品が知られています)。本人自身も南毛利村恩名(現在は厚木市内)の地主の長男に生まれ、農家風のりっぱな屋敷に住んでいました。

同氏は、早稲田の仏文を出た人でもありましたので、どういうきっかけはわかりませんが、ラミュという作家の存在を知ることになります。

「フランスにおいては、ラミュズ氏のやうに、スイスの一寒村から一步も出ることなく、この地方の現実を見つめつつ作品を書いている作家がいることを知り、力強いものを感じた」と、こう、書いています。「スイスの一寒村から一步も出ることな」いラミュが「フランスいる」のはちょっと奇妙なのですが、それは別として、和田は、ラミュこそ同志だと信じたのです。

そして、石川と違い、ラムユに自ら関心をもち、ラムユと文通していました。そして、ラムユから *Farinet ou la fausse monnaie* という作品を贈呈され、さっそく、これを翻訳しました。CF ラミュズ著『贋金』⁴⁾ 三笠書房 (昭和 14 年) という本として上梓されました。

和田は、さきほど言いましたように、ラムユを農民作家だと信じていたのですが、どうもこの作品は農民小説とか農村の話とはいえないのです。このため、和田の作品の愛読者層は、このラムユには違和感を覚え、また、和田自身も、二度とラムユの翻訳はしていません。ちなみに、私事になりますが、生前の和田氏に、ラムユからの書簡があれば拝見したいというお願いをしたことがあります。が、知人に貸したら返って来なくなり、紛失してしまったとのことのお答えでした。

“山岳小説家”？

ラムユに *La Grande Peur dans la montagne* という、民間伝承風の物語があります。この作品が、河合亨 (1910-1993) によって『恐怖の山』というタイトルで翻訳出版されました。昭和 33 年 (1958) のことです。

この小説は、「山」(montagne) という単語が表題にあるためでしょうか、河合は、作家がスイス人なら、山はアルプスであろう、したがって、アルピニズム文学、すなわち登山 (山岳) 文学だという連想ゲームのようなところから翻訳したのではないのでしょうか。というのは、この翻訳が、ヒマラヤ登山記録とか有名スキーヤーの伝記とかを並べた朋文堂の「山岳文学選集」の中の一冊として上梓されているからです。確かにこの小説の舞台はアルプスですが、登山や山岳紀行などをテーマにしたものではありません⁵⁾。河合亨は早稲田の仏文の教授だったのですが、登山愛好家でもあり、おそらくこの作品を取り上げたのでしょう。翻訳のあとがきでこう述べています。

『「恐怖の山」はスイスの有名な山岳小説家 C・F・(シャルル・フェルディナン) ラミュズの作品である。書かれたのは 1928 年であり、この作家の代表作ともいえる作品である。C・F・ラムユズは山地農民作家であり、20 世紀のフランス小説界では地方主義 (レジオナリズム) のすぐれた作家として知られている。すなわち、この作家は農民文学の作家なのであって (略) C・F・ラムユズは 1878 年、スイスのレマン湖のへのキュリ (Cully) で生まれた・・・ (パリから) 故郷にもどり農民文学の雑誌をつくり、農民文学の建設に生涯を捧げ (略)』。

河合に依れば、ラムユは、「山岳小説家」であり、「山地農民作家」であり、「地方主義作家」であり、「農民文学の作家」となっています (キュリという読みもまちがっていますし、そもそもキュイ生まれではありません)。

ラムユが生涯をかけてそこから抜け出そうとした“呼び名”をみごとに (?) 羅列しています。もちろん、この誤解は、たんに河合の誤解というより、フランス側の誤解の反映でもあると思われます。実は、フランスの代表的な百科事典 (「20 世紀ラールス」) の“ラムユ”項目記事の受け売りがここに見られるからです。

ここには二重の誤解問題が見られます。ひとつは、徹底的にラムユを周縁扱いするパリ中心の言説です。もうひとつは、日本のフラン文学研究が、フランス共和国文学に、無反省なまま依拠している点です。(最近、ヨーロッパでは、フランス文学でなく、フランス語文学という概念で論じられるようになり、スイスもア

⁴⁾「贋金」*Farinet ou la Fausse Monnaie*, 1932 年。ファリネという実在の人物の偽金事件をヒントに、アルプスの谷を舞台に、山で手に入れた純金で贋金を鋳造し、これを村人たちに売り、制度としての貨幣に背を向け、自由人を囁く主人公を (事実とはことなり) 義賊に仕立てた反国家人物への讃歌。

⁵⁾「恐怖の山」*La Grande Peur dans la montagne* 1925 年。サッスネールという高山の草地があったが、ここは村人たちが利用しない放置された土地だった。一部の村人が、貧しさのあまり、長老たちの忠告を押し切って、家畜を放牧するためこの耕地に上がってみることにした。しかし、そこでは、次々と家畜が死に、不気味な恐怖が支配する土地だった。とうとう氷河が崩壊し、狂ったように鳴動してなだれ落ちてきた。自然は常に超越的で不可思議な存在なのだという民間伝承仕立ての作品。

ルジェリアもカナダも、その範疇で同じ土俵で扱われるようになってきていることは申しあげておかなくてはなりません。)

本日は、時間の関係で、代表的な三つの翻訳に限ってご照会しましたが、そのほかにも申しあげたいことは同工異曲です。たとえば、ストラヴィンスキーの有名な朗読付き管弦楽の「兵士の物語」*Histoire du soldat*, (théâtre musical, musique Igor Stravinski)の朗読歌詞は、ラムユの作詞したものです(Éditions des Cahiers Vaudois, 1920, Lausanne)。しかし、邦訳歌詞の解説ではラムユはまったく無視されています。

ラムユは、なぜ見えなかった？

プロレタリア文学とか農村文学とか登山文学と誤解されてラムユは日本に紹介されました。翻訳した三人は、一流の文人で、フランス語にもフランス文学にも精通していました。なぜなのでしょう？簡単にはまとめられないのですが、おおよそこういうことでないでしょうか。二点を指摘しておきたいと思います。

1 文学の権力編制

フランスの作家ではなく、またスイスの文学者という枠も不確かなラムユのような場合、焦点の合わせ方に戸惑いがあったと思われます。ラムユの不幸は、使用言語がフランス語であったことです。強大な「フランス文学」の権力編制から位置測定されてしまうのです。ラムユのもどかしい抵抗はそこにあったのですが。ラムユのような作家を位置づける一番簡単な方法は、周縁作家、要するに、特殊な作家だと決めつけることです。こういう現象は、ベルギーなどでも起こり得るのですが、同じような小国でもデンマークではありえません。たとえば、アンデルセン(アナスン)は、「普遍文学」として扱われます。デンマーク語のおかげ(?)です。

2 ローカル・ナレッジというジレンマ

スイス・ロマン地方で作家活動をし、作品が書かれれば、そこに「文学」が成立するのが幻影だということをラムユは重く受け止めていました。ラムユは、地域固有の知(ローカル・ナレッジ)としての「文学」を構築することで文学的自立をしようとして、逆説的に、特殊な世界に沈潜していたわけです。このラムユ独自の意図と営為が、権力側からは、矮小化されたローカル local という表層だけが取り出されたからではないでしょうか。「ローカル・ナレッジ」local knowledge は、ご承知の通り、文化人類学者クリフォード・ギアーツの提唱した概念(1983年)です。「詩作がそうであるように、いずれも場所に関わるわざ(crafts of place)である。それらは、地方固有の知識(local knowledge)の導きによってうまく作動するといつてよい」ということです。ですが、決して、「単純に、局所的な知とか、文化相対主義的な意味での土着の知を直接示しているものではない」(池田光穂)のです。

むすび

ラムユというスイス・ロマン地方の作家を取り上げ、文学は決して普遍的には存在しえないこと、ブンガクを成立させているのは、ひとつの制度であるということを述べたつもりなのですが、うまく説明できているか、こころもとありません。というのは、私たちは、フランスや英米や日本にどっぷりつかってしまっているからです。言語が無前提にその枠組みをつくり、それが国家によって閉じ込められている状況で作られる文学作品を疑わず享受しているからです。なかなか「文学」の実体を、その外に身を置いて見るのが困難なのです。

スイス・ロマン文学という枠組みを普遍化させることが可能なのかという問題を別としましても、この機会にスイス・ロマン文学に多少でも関心を寄せていただければなら、文化人類学者のように、スイス・ロマン文学に直に当たっていただければ幸いです。日本でできる、スイス・ロマン著作、研究書への参

与観察の一助として、法政大学多摩図書館には 2000 タイトルの文献が集積されていることを、この場をお借りしてお知らせして、本日の報告のしめくりとさせていただきます。

日本・スイス国交樹立 150 周年記念国際シンポジウム

慶應義塾大学日吉キャンパス; 2014 年 10 月 11 日

注) 当日の発表においては、パワーポイントで、写真、資料、説明文をあげ、口頭説明を簡略化した。ここでは発表内容を本来の文字稿に戻した。なお、話柄についてはスイスでの「ラミュ学会」で発表した箇所が多少含まれます。ご容赦ください。